

---

# 奇妙な関係

鳥居なごむ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

奇妙な関係

### 【コード】

N5615D

### 【作者名】

鳥居なごむ

### 【あらすじ】

男は人生に疲れ自らの命を絶とうと決めた。八階建てのマンションの屋上から飛び降りようとしたとき、風変わりな容貌の女に声をかけられる。彼女も男と同じ飛び降り志願者だという。二人の組み合わせないやりとりが続くうち、「人生の最後くらい厳かにできないの」と、さらにもう一人の女が現れる。そして彼女もまた、飛び降り志願者だった。偶然出会った奇妙な関係の三人が展開する不可思議なやりとり。事態は思わぬ方向へ進む。余談になりますが、作中ではある言葉を避けて読みにくい文章になっていると思います。そ

奇妙な関係

の点、ご了承ください。

## 序章

女はモニターを見つめていた。

白を基調とした斬新なデザインの真新しいオフィス内のことである。女は時折足を組み替えながらデスクに設置された最新のパソコンに映し出されたデータを次々とスクロールさせていた。その様子を彼女の後ろに立った一人の男がじつと眺めている。

「この人にするわ」

女は画面に映った人物を指差しながら言った。聞いていた男がパソコンを覗き込みそれに答える。

「ずいぶんと、対照的な方を選ばれるのですね」

「ええ、でもこれくらいの手相手じゃないと釣り合わないわ。それに、この人でさえ胸以外で私に勝っている要素はなにひとつないでしょう?」

強気な問いに男は少し戸惑いながらも気になった点を指摘した。

「失礼ながら、身長も彼女のほうが高いように思いますが」

くるりと椅子を回転させて女は男と向き合った。初めて女の顔を正視した男ははっとした。彼女の年齢を事前に知っていたが、目の前に現れた顔はその歳に似つかわしくない幼さだった。

「バカね。女は高ければいいってもんじゃないわ。あなた、『彼女に望む身長ランキング』の一位をご存じ?」

「……いえ、申し訳ありません」

「あら、リサーチ不足ね」

女はやれやれという風に肩をすくめた。

「失礼しました。それでは、いつお会いになりますか?」

一礼したあと男は姿勢を正して訊ねた。

「会わないわ」

男は当惑した。勘違いや聞き違いという可能性は考えられなかった。しかし男は、もう一度確かめるように繰り返した。

「会われないのですか？」

「ええ、そうよ。連絡先だけ教えてちょうだい。いつ決行するかわからないから密に連絡を取りたいの」

そう言うのと女はくるりと椅子を回転させてモニターに向き直った。「わかりました」

男は足早に退席し、封筒を持って戻ってきた。女はそれを受け取るとオフィスから出ていった。入れ違いで別の女が部屋へ入ってくる。女はデスクにつきモニターに残された画面を入念に調べた。「社長、あの方とはいったいどういう関係なのですか？」

「腐れ縁かしら。それより、あなたは彼女を見てどう思った？」

女社長は首だけ男へ振り向いて訊ねた。

「可愛い方だなと思いました。それがなにか？」

「質問を変えるわ。もし彼女に好きと告白されたらどうする？」

「今は彼女がいるので困りますが、いなければ大歓迎です」

女社長は微笑み、そして、男に事の全容を話した。

「……それはほっとけませんね」

「そうね」

動揺している男の肩をぽんつと叩いて、女社長は「万が一のためにフォロワーするから大丈夫よ」と意地悪な笑みを浮かべて歩き出した。

「驚かせないでくださいよ」

男は女社長の後を追った。

## 第一話

いつもより空を近く感じた。

目の前には一面の青空が広がり、心地のよい風が吹き抜けていく。いつもより風を強く感じた。気持ちの問題ではない。俺は建物の屋上で空を見上げているのだ。地上と比べれば、当然、空は近く風も強いだろう。ゆっくりと視線を落として、八階建ての屋上から向かいにある病院を見下ろした。すでに覚悟は決めている。あとは瞳を閉じて、たった一歩進むだけだった。

この世に未練がないといえば嘘になるが、俺はもう頑張れるほどの余力を残していなかった。疲れ果てていた。すべてを終わりにすることを望んでいる。そつと瞳を閉じて、柵から手を放した。強い風が吹けば俺の意思とは無関係に人生を終えることになるだろう。しかしそんなまどろっこしい方法を取る必要はない。

満面の青空を思い浮かべながら、そこへ飛び込むだけでいい。それですべてが終わる。

「ちよつと待つて！」

刹那、後ろから声がかかった。

びっくりして落ちそうになったので、俺は慌てて柵をつかんだ。

いきなり大声出すなよ、落ちたらどうするんだ。

俺は喉まで出かかった言葉をなんとか飲み込んで苦笑する。よくよく考えれば飛び降りるところだったのだ。なんの問題もないではないか。

「私の勘違いだったら申し訳ないんですが、あなた今、そこから飛び降りようとしてませんか？」

「ええと、その……」

俺は口ごもった。事実なので否定できない。言い訳を考えながら声のする方へ顔を向けた。

そこには長身の女の姿があった。ボサボサの髪は肩まで伸びてい

て、ぎよろつと見開いた目でこちらを見ている。彼女は上下とも真っ白のパジャマ姿で裸足という格好をしていた。端正な顔立ちをしているが、綺麗というよりは不気味が正しい表現に思えた。どこことなく、その姿は幽霊を連想させた。

俺の訝しげな視線を察したのか、彼女はパジャマの裾をつまんでこう言った。

「あ、こんな格好してますが天使ではありません。ただの人間です」  
どこが天使だ、とツツコミを入れそうになった。だがしかし、たしかに彼女はこの世のモノとは思えない、得体のしれない独特な雰囲気醸し出していた。墮天使になら見えなくもない。いや、どうやっても見えない。俺は無理に肯定しようとしたことを悔やみつつ、俺を見据えた彼女の瞳がいつこうに瞬きしないのを気にしていた。

「そのとおりです。あなたが声をかけていなければ、今ごろ私は地面に転がっていたと思います。もちろん、生きてはいないでしょう」

結局、彼女の質問に素直に答えた。

「ああ、それはよかった。あなたに飛び降りられては困るところでした」

彼女はほつと胸を撫で下ろすような素振りを見せた。とにかく無表情で安堵したのかどうかもよくわからない。ただ言葉通りに受け取れば俺が飛び降りなくてよかったと思っっているらしい。

理由はいくらでも思い当たる。この建物の持ち主なら悪い評判を立てたくないだろうし、管理人でも飛び降りそうな人を見かければ、とりあえず声くらいかけるだろう。仮にそういった立場にない人物でも黙って見過ごせるやつは稀なはずだ。

それにしても、彼女はどうかやって俺がここにいることに気づいたのだろう。施錠もされていない無用心な管理だが、こんなところちよつと暇を持て余しているからといって訪れるような場所ではない。それに俺がここに着いてから二十分も経っていないのだ。いくらなんでもその短い時間に偶然来たとは考えにくい。意識的にやって来たとは思えないのだ。

ではなぜ？

ひとつの考えがひらめいた。ああそうか、屋上へ入るとなにか警告音のようなものが鳴る仕組みになっていて、それで管理人である彼女が飛んできたのかもしれない。寝起きならパジャマでも不思議ではない。目が据わっているのも無理やり起こされたからかもしれないしな。

「あの、あなたはここの管理人さんですか？」

「面白い方ですね、こんな格好の管理人いませんよ」

彼女は肩をすくめて言った。どうやら俺の勘は外れていたらしい。ではどうして彼女はここに来たのだろうか？

その答えも飛び降りるを隠しおおせる言い訳も思い浮かばず黙っていると、彼女から声をかけてきた。

「今日は絶好の飛び降り日和だと思いませんか？」  
はい？

俺は目が点になった。彼女の言葉の意味がまったく理解できなかった。飛び降りるのに絶好なものもないだろう。こういう状況に陥ったときから毎日が暗澹としていた。空が晴れていようと曇っていようと気にもならなかった。絶望しか見えていなかったからな。

落ち着け、ツッコミどころはそっちじゃないだろう。

問題にすべきは文字通りに受け取ると彼女も飛び降りるためにここへ来たということだ。飛び降りるということは、つまり、そういう結果になる。

「あの……ひよっとしてあなたも飛び降りるつもりなのですか？」

「ええ」

相変わらず能面のような顔を微動だにさせず端的に答えた。

改めて彼女をみて、俺は今さらながらおかしな点に気がついた。瞳を閉じないというのはこの際よしとしよう。飛び降りなんて物騒なことへの考えが及んだ時点でまともな精神ではないだろうからな。気になったのは服装だ。あの格好で遠くから来たとは考え難い。もし警察に発見されたら間違いない職務質問を受けるだろう。

で、だ。

「ちよつと飛び降りに行こうと思ひまして」と彼女。

「ああ、そうでしたか。ではお氣をつけて」と警察。

なんてことには絶対になるまい。任意同行で署まで連れていかれるに決まっている。

そこでふと、さきほど眺めていた病院の存在を思い出した。

考えるより先に口をついていた。

「ひよつとして、あの病院から抜け出てきたんですか？」

根拠がないわけではなかった。パジャマに裸足という格好も入院している患者なら合点がいく。さらに不治の病に侵されているなど、ここへ来た理由も豊富に取り揃っているだろうしな。

「あ、はい」

ちよつとまぬけな口調で彼女は答えた。あつさり肯定されてしまった。

「なるほど。では、もうひとつお訊きます。どうしてあなたは私が飛び降りると困るんですか？」

彼女はなぜそんなことを訊くのかわからないという風に首を傾げた。ややあつて、その妖艶な唇を動かした。

「だってそうでしょう。あなたが落ちて、私も落ちるんですよ。同じ時、同じ場所で飛び降りるなんて、発見者にひどい勘違いをされるかもしれない。考えただけでもおぞましいです」

なんだそりゃ。

というか、軽いイジメにあつた気分である。頭が痛くなった。

## 第二話

「ええと、つまり、そうなると困るから私に飛び降りるなと？」

「はい」

絶句したね。あまりに無茶苦茶だ。なんだか腹が立ってきた。

「ほかのところで飛び降りればいいじゃないか！」

俺が声を荒げると彼女は切なそうに見えなくもない表情をみせた。ちよつと強く言い過ぎたかもしれない。しかし謝る気にはなれなかった。

「この格好では目立ちすぎなんです。ほかの建物の屋上へ行く前に病院の関係者に見つかって連れ戻される可能性だってあるでしょう。それに脱走がバレれば監視はより厳しいものになると思います。そうになったら、もう病院から出ることさえできないかもしれないんですよ。可哀想だと思いませんか？」

急ぎの得た意見を言い出すしな。

たしかに、一理ある。ものすごく理不尽な扱いを受けていたにもかかわらず、俺は彼女の説明に納得してしまった。理屈として矛盾が見当たらないのである。俺は怒りを忘れて、彼女が病院を抜け出してまで人生に終止符を打とうとする理由が知りたくなった。

できるだけ柔らかいトーンに変えて彼女に訊ねた。

「そうまでして飛び降りなくてはならない理由はなんですか？」

「……思い出したくない」

彼女は頭を抱えて震えだした。とても演技とは思えなかった。それゆえに、俺はどうしても理由を知りたくなってしまったのだ。不治の病なのか精神的なものなのか、はたまたもつとくだらないことでもいい。同じ境遇に陥った人間の話に興味を抱いたのである。

卑怯だと思いつつ、俺は彼女にある提案を持ちかけた。

「あなたの切実な思いを聞いて考えが変わりました。飛び降りなくてはならない理由次第で、俺はここを去ってもいいと思ひ直しまし

た」

「本当ですか？」

彼女は顔を上げてこちらに視線を移した。瞬きをする気配は未だにない。俺は静かに首肯した。

「話は長くなりません。途中で誤って落ちられても困りますから、まずは柵の内側に戻ってください。内容はそれからお伝えしましょう」  
なるほどたしかに、俺はすっかり自分の命が風前の灯であることを忘れていた。真剣な話を柵につかまりながら聞くのは滑稽だし、彼女のいうように誤って落ちる可能性もある。俺は素直に従うことにした。柵を越えて内側に戻ると、相当長い話になるのか、彼女は貯水庫へ登るために設けられたコンクリートの段差に腰を下ろしていた。俺もそこへ向かいその隣に座る。

彼女は開口一番こう告げた。

「わかっているとは思いますが飛び降りる順番は関係ありません。あなたが先で私が後でも、その逆だとしても結果は同じです。問題はここで両方が飛び降りてはいけないということです。ですから、もしどのような形であれ一人が飛び降りたらもう一人は諦めると約束してほしいんです」

真剣な眼差しの奥に彼女の決意を垣間みた気がした。こだわっている部分が俺との関係を疑われたくないってとこなのがへこませられるけどな。

「約束するよ」

俺は彼女に告げた。騙すつもりはない。もし彼女が先に飛び降りたなら、どんなことがあってもこの屋上からは絶対に飛び降りないと誓った。彼女は呪縛から解放されたようにふっと吐息を漏らした。微かな変化だったがあたしかに安心したような表情を象っていた。

瞬間　彼女はなりふりかまわず柵の方へ走っていった。反射的に俺はそれを追う。柵をよじ登ろうとするのをなんとか制止せよと、彼女ははつきりと聞き取れる音を立てて「ちっ」と舌打ちした。

なんて奴だ、大嘘つきじゃないか！

彼女は最初から話す気などなかったのだ。信じた俺がバカみたいだった。

さきほどのコンクリートの段差まで引つ張って行き座らせ、俺は仁王立ちで彼女を見下ろし睨みつけた。そして、なぜ嘘をついて逃げ出したのかと彼女を問い詰めた。質問には一切応答せず、彼女はうなだれているだけだった。放っておいたら死んでしまいそうな悲壮な顔つきをしている。ああ、そういえばそのつもりでここにいるんだっただな。それにしても俺はなんでこんなことをしているんだろう。なぜまだ生きているんだろうか？

しばらく経つと、彼女は観念したのかこころもち頭をあげた。

「やっと話す気になったのか？」

俺が糾問すると、彼女は少し照れた様子でこう言った。

「仕方ありません、キスしてあげるので帰ってください」

俺はずっこけた。彼女の思考回路がまったく理解できない。恥ずかしそうなわりに瞳は見開いたままだから怖いしな。なんとか持ち直して睨み直すと、彼女は俺を見上げるように顔を起こした。

「わかりました、おさわりまでは許可しますから」

ぷいっと横を向き彼女は両手で肩を抱いて頬を赤らめた。懇願する態度はしおらしいが言ってることはめっちゃくちゃだ。

「なんでそうなるんですか！」

衝動に耐え切れず、俺はそう叫んでいた。

「とりあえず、落ち着いてください」

たしなめるように彼女に諭され、俺は悔しくて仕方なかった。大げさに俺をなだめるような拳動を取る彼女が憎らしかった。まるで俺のほうが悪いように見える。怒らせたのはどこの誰だよ。また変な事を言い出されないように今度は先手を打った。

「あなたの身体が目的ではないんですよ」

「男は皆、そう言うんです」

彼女はにべもなく言った。

そうですね。そりゃたしかに男は身体が目的じゃないとかいうけどさ。でも今は揚げ足取るなよ。そういう状況じゃないだろ。心の中でしか悪態をつけない自分を情けなく思いつつ、俺は極めて冷静に応酬した。

「いや、今まであなたが出会ってきた男はそうかもしれないませんが俺は違いますよ」

彼女は俺の顔をまじまじと見ていた。完全に振り回されている。彼女の飛び降りる理由を聞くはずが、これでは俺が彼女を口説いているようにしか見えない。このままでは踏んだり蹴ったりだ。せめて当初の目標くらい達成したい。

「それにあなたの話聞いたあと、誰かにその内容を伝えることもなく、俺も違うビルから飛び降りるんです。情報が漏れるなんてことはありませんよ。だから、話してくれませんか？」

真摯に話したのが功を奏したのか彼女は黙って話を聞いている。もう一押しだ。俺は普段見せないような飛び切りの笑顔を貼り付けてにこりと口許を緩めた。一瞥すると彼女は俺から視線を外してかぶりを振った。

「いけない。また騙されて酷い目に遭わされるところでした」  
失礼な。わりと自信あったのにさ。

彼女は極度の男性不信なのかもしれないと前向きに考えることにした。いや、それにしても気軽に話しすぎだな。どちらにしても、過去になにかあったことは間違いなさそうだった。

「もう少し建設的な話し合いをしましょう」  
そう前置きして、俺は質問を続けた。

「飛び降りたい理由はその過去の出来事が原因なんですか？」  
「……答えたくない」

彼女は表情を曇らせた。これでは、はいそうです、といているようなものである。なにがあったのだろう。理由が過去の出来事に起因するなら彼女はどうして今日という日を選んだのだろう。謎は謎を呼ぶばかりだった。俺はその真相を知りたいと願った。飛び降

りるためにやって来た屋上で、運悪く居合わせた飛び降り志願者に翻弄されるといふ点がいかに俺の運のなさを強調してるようで癪だがここまできたら引くに引けない。仮に引き下がってどこかで飛び降りなんてしようものなら未練が残って成仏できそうにない。

すつと唐突に彼女は立ち上がった。背が高いため俺たちは同じ視線で向き合う形になった。ぎよろつと見開いた彼女の瞳に俺が映っていた。

### 第三話

「私を口説いている場合ではありません。このままでは拉致があかないわ」

真顔で言うな。そして瞬きをしてくれ。

「……口説いてません」

俺は小声で反論しておいた。誰のせいでこんなややこしいことになったと思ってるんだ。呼びかけられたときに、そのまま滑り落ちていればどれだけ楽だっただろう。最後にもう一度だけ粘って、それで解決しなければ諦めよう。ほかの建物へ移動するだけだ。俺は彼女と違ってまともな服装をしている。近くの建物へ移動するわずかな間に怪しまれることもないだろう。

「あなたが飛び降りたい理由を教えてください、その内容がどれほどいい加減なものでも俺はここを立ち去ります」

「……思い出したくない」

この台詞の一点張りで譲ろうとはしなかった。

「わかりました。俺はもう帰りますのでご自由に飛び降りてください」

俺は屋上にひとつだけあるドアへ向かった。後ろでぴたぴたとテナポの速い音が聞こえてきた。裸足で歩く彼女の足音だろう。音は迷いなく柵へ向かっていった。俺はドアに手をかけたものの、やはり気になってしまい、彼女がいると思われる方向へ振り返った。

あるべきはずの姿がそこになかった。一瞬、本物の幽霊だったのではと脳裏によぎったが、すぐにそうではないことに気がついた。視界の端に腹這いになってこちらをうかがっている彼女を捉えたからである。いろんな意味で本物の幽霊より怖かった。

なにやっつてんだよ、この人は。

「……」

彼女はなにか言いたげな顔で立ち上がり、パジャマを叩いてほこ

りを落としていた。そのあとこちらへ向かって歩いてきたので、私はドアの中に逃げ出そうかと思った。そうしなかったのは、近づいてくる彼女の髪をかき上げる仕草に魅せられていたからだだった。魔力というものが本当に存在するなら、きっとこの感覚なんだろうな。俺はぴくりとも動けなかった。

「やっぱり、私が飛び降りたあとに戻ってきて飛び降りるつもりだったんですね」

「しませんよ、そんなこと！」

「いいえ、あなたは振り返って私を探していたわ」

俺は閉口した。たしかに探していたが、それは彼女のことを気にかかったからであって、決して飛び降りたのを確認するためではなかった。無論、そのあとに飛び降りるつもりもなかった。偽りのない本音だった。

「誤解です！」

「いいえ、もう信じられません！」

もうっというか最初から信じてなかったじゃねーかよ。

「だいたい、俺はあなたと違ってここで飛び降りなければならぬ理由がない」

「騙されたりしません！」

いつの間にか俺たちは取っ組み合っって押し問答をしていた。

いい加減しんどいなと思っただそのときだった。

「静かにしてください！」

俺と彼女の口論を制止する別の声があがった。おかしいことである。俺たちは今ドアの前にいるのだ。そして屋上の出入口はここにしか存在しない。おそろおそろ声の方へ目をやった。スーツ姿の女が貯水庫の裏側から出てきた。

「人生の締めくくりくらい厳かにできないの！」

彼女はぴしゃりと言った。凜とした表情をしている。パジャマの女と違ってスカートだったので、つつい足に目がいつてしまった。男の性って甚だしく情けない。

「こんな騒々しいところじゃ、落ち着いて飛び降りることもできないわ」

また変なのが出てきた。勘弁してくれ。ここは飛び降りのメッカなのか？

なんで俺が飛び降りると決めた日に、同じとき同じ場所で飛び降りようとしてる人間が三人もいるんだよ。絶対おかしいだろ。ありえないだろ、普通。俺はうなだれた。

少し目を離れた隙に、パジャマの女とスーツの女は対峙していた。貯水庫とドアのちょうど中間地点、お互いが歩み寄ったのだろう。口火を切ったのはパジャマの女だった。

「あら、あなたよく見たら私ほどじゃないけど可愛いわね。どうして飛び降りしようなんて思ったのかしら？」

「ふふ、私があるたより劣っているなんてありえないわ」

スーツの女は縁の赤いメガネを上げながら言い返した。もうなにがなんだか訳がわからない。おさわりまでOKのときに素直に受け入れておけばよかった。俺は激しく後悔した。

「そのあなた、男から見て、どちらが魅力的かこの女に教えてあげて」

不意にスーツの女は半歩ほど移動してパジャマの女の横をすり抜けるように俺を指差した。ひよっとして後ろに誰かいるのかと思いついて振り返って確認したが誰もいなかった。間違いなく俺を示しているらしい。ああもう、関わりたくなかったのにな。男は俺しかないのだから仕方がない。乗りかかった船だと決心した。だいたいこのタイミングで「帰ります」と言っても二人が見逃してくれるとは思えないからな。どんどんあらぬ方向へ事態は進んでいる。

俺は二人を比較してみた。パジャマの女は長身の細身で肩にかかるボサボサの黒髪、上下とも真っ白なパジャマで裸足である。対してスーツの女は小柄で茶色のボブカット、毛先が外ハネになっていて赤いメガネをかけていた。スーツにメガネという格好も、幼い容姿のためにOLというよりはその手のコスプレに見えた。驚いたこ

とに二人ともかなりの美人である。もちろん美人という前にいろいろツッコミたい要素満載なのだが、それを差し引いたとしてもやはり美人なのだ。

こんなシチュエーションじゃなければ羨ましがられる光景なんだろうけどな。今はちつとも嬉しくないし楽しくもないんだよ。

俺が答えに悩んでいるとスーツの女が口を開いた。

「迷う必要なんてないわ、わたしを抱き寄せるだけでいいのよ」  
すかさずパジャマの女が異議を唱えた。

「ちんちくりんは放っておいて、私にキスするだけでしょ」  
趣旨変わってないか、おい。

どうして飛び降りるためにやって来た屋上で、二股をかけていた男の末路みたいな展開に遭わなければならぬんだ。なんの罰ゲームだよ。

俺たちは三角形を描くような位置関係で貯水庫に近い地面に座っていた。かれこれ二十分くらい無駄な時間を過ごしている。まあ、人生最後のロスタイムとでも思っておくことにしよう。生きてる時間がほんの少し延びるだけだからな。気にもならない。

「早くどっちがいいか決めて」とスーツの女。

「そうですね、とても簡単なことでしょう」とパジャマの女。

俺は二人の女に引つ張られていた。悪くない。それどころか、正直、ちよつと嬉しい。男なら誰でも憧れる状況だろう。さっきまではうつとうしいだけだったのにな。

あらぬ気分を振り払って、俺は局面を打開する策を考えた。しかし結論なんて出るはずがない。パジャマの女もスーツの女も一癖あるが、それでも容姿だけならそうそうお目にかかれない上玉なのだ。タイプはまったく異なるが二人とも捨てがたいのである。まあ、選んだ方と付き合えるわけでもないんだが、選ばれなかった方の悲しむ姿を見たくはないだろ。

「なんでこんなに簡単なことが決められないの！」

なにギレだよ。というか、こいつ体は小さいのに胸はけっこうあるな。

「そうですよー」

とりあえず、あんたは瞬きしてくれ。

まったくもって不自由な二択である。

こんなところではなく、もっと別の場所で出会いたかったな。いやいや、なんで俺はこのおかしな二人をちょっと好きになってるんだよ。これが俗にいうボディタッチの効果なのだろうか？ だとしたら抜群の破壊力だぞ。

「二人とも今日はじめて会ったんだから、どちらが素敵かなんて決められないですよ」

苦肉の策で俺はそう絞り出した。深い考えもなく思いつきでこぼしたのだが、彼女たちはたいして疑念も抱かず「なるほど」と顔を見合わせた。単純で助かった。

いい機会かもしれないと追い討ちをかける。

「そもそも、俺たちは飛び降りるためにここに来たんですよ？」

俺の問いに二人はうなずいて答えた。黙ってたら本当に可愛いんだけどな。もったくない。

## 第四話

「それなら三人が無事に飛び降りることさえできれば問題ないですよね？」

言ってから俺は苦笑した。無事に飛び降りるってなんだよ。飛び降りたら間違はなく無事では済まないだろう。しかし二人は矛盾のある提案を聞いて感心している様子だった。

「それなら案があります」

それぞれにつかまれている両腕を振りほどき、俺は柵の外に置き去りになっていた鞆を取りに行った。勢いよくパジャマの女が俺を追ってくる。そしてまた腕を絡めとられた。

「どうしたんですか？」

「ここでは飛び降りさせませんよ」

パジャマの女に指摘されるまですっかり忘れていた。俺は出し抜いて飛び降りるなど考えてもいなかったが、どうやら彼女は露ほども俺を信用していないようだった。俺を凝視する目がそう物語っている。彼女に腕をつかまれたまま柵まで行き俺は鞆の中からダブルリングノートとシャーペンを取り出した。

ついでに首だけ出して下を覗いてみた。

「ちょ、ちょっと」

彼女が手に力をこめる。かまわず下を確認したが地面に俺の探しているものは見当たらなかった。仮説のひとつは消えた。本当はとつくに落ちていて、今起こっている出来事はすべて幻ではないかという不安が頭の中をちらちらよぎっていたのだ。

「地面に血を流した俺が転がっているんじゃないかと思ったんですが、どうやらまだ本当に生きていますみたいですね」

いつのまにか後ろに立っていたスーツの女が吹き出した。パジャマの女は俺から手を放し、笑いを堪えるためなのか手で口を押さえ、小刻みに震えていた。恥だ。この異様な二人に笑われると生きて

いく自信がなくなる。ああ、でもそれでいいんだった。

元の場所へ戻って座り、俺は考えた案を二人に話した。

「これで遺書を書きましょう。そして、自分一人で飛び降りたことを明記しておくんです。そうすれば私たちを発見した人も誤解しないと思うんですよ。それにそれぞれの位置で飛び降りるようにすれば騒がしくもないですからね。遺書は飛ばされないように靴で固定しておけば充分でしょう」

「靴、ないよお」

すかさずパジャマの女が泣きそうな顔をしながら声を漏らした。しまった、そういえばそうだった。彼女は裸足である。どこまで世話をかけさせれば気が済むんだ、こいつは。俺の心の叫びなんてどこ吹く風で彼女は本当に今にも泣き出してしまいそうな顔をしている。こういうしおらしい態度のときはめっちゃくちゃ可愛いんだがな。「靴を貸すからそれで固定すればいいよ」

俺の話に耳も傾けず、彼女は三角座りをして殻にこもってしまった。スーツの女に目配せすると彼女はやれやれという風に肩をすくめるだけだった。この状況を打開する気はないらしい。

しばしの沈黙が訪れた。

なにをやっているんだろうな、俺は。人生最後の日に偶然出会った奇妙な女二人にさんざん振り回されながら生かされている。ほんの一時間前、俺はあと一歩踏み出すだけのところまでいっていたのだ。それなのに今は見当もつかない暗闇の中に迷い込んでいる。

命を絶つてのはこんなにも大変なことなのか？

それとも心のどこかで俺は生きたいと思っっているんだろうか？

さっぱりわからない。

「……疲れました」

俺はお手上げという風に肩をすくめた。本意だった。

「あなた、飛び降りる理由はなんなの？」

出し抜けに、スーツの女が訊いてきた。赤いメガネの奥にあるくりつとした瞳で俺を見据えていた。三角座りでひきこもっていたパ

ジャマの女もこちらに視線をよこした。冷静に判断すればするほど奇妙な関係だ。ほんの少し前まで他人だった美女二人と飛び降りる事情について真剣に会話している。

「理由？」

「そうよ、理由。あんただって暇つぶしで飛び降りに来たわけじゃないんでしょ？」

スーツの女はやや面倒くさそうに早口で言い切った。

そうだ、理由だよ。俺はパジャマの女の理由を知りたいなんて思ったからこんな目に遭ってるんだ。忘却の彼方へ飛びさっていた懸念材料を見事に引き戻されてしまった。こうなるとやっかいで、もう一度忘れてくれと念仏のように唱えても忘れやしない。

「話したくないのなら別にいいんだけど」

しばらく経つても返答がなかったからか、スーツの女はそう言って顔を横へ向けた。さっきまでの勢いだと無理にでも口を割らせそうな感じだったのにどうしたことだろう。急にいじらしくなっていた。なにかの作戦じゃないよな。

「は、はい、私の理由を聞いてください」

スーツの女の手をつかみながらパジャマの女が切り出した。

「……思い出したくないっていつてたくせに」

さすがに言つてやったね。するとちゃっかり俺に聞こえないようスーツの女の耳元でパジャマの女はその内容をささやいていた。ひどい話である。俺に話してくれてたらとっくに解決して人生に別れを告げていられたんだぞ。

とにかくパジャマの女が話し終えるまで俺はしょんぼりと膝を抱えて待っていた。

「それはひどい……」

スーツの女は額にじつとりとした汗を浮かべて動揺していた。死をも視野に入れるような理由なのだから相当ひどい出来事があったのだろう。それは予測できる。しかしだ。それよりもなによりもこの忌々しい気持ちはどうにかしてくれ。なんかすごく悔しいんだ。

ものすごく悔しいんだ。そのはがゆさといったら表現のしようがないほどにな。

「さっきまで喧嘩してましたよね？ どっちが綺麗とかなんとか」  
苦し紛れの皮肉をぶつけてみたんだが、二人は申し合わせたように「そんなことないわ」と取り繕った。この女の連帯感ってなんだろうな。俺は一人取り残され暗澹な気持ちになっていた。可愛いとはいえ、この二人、やっぱり大嫌いだ。

「あなたも話す気になった？」

そんな思いを知ってか知らずかスーツの女は改めて俺に訊いた。さらに語を継ぎ足す。

「借金かなにか？」

「違いますよ」

俺はスーツの女の質問を否定した。彼女は「そう」とつぶやいたあと、あたかも当然であるかのように「貯金はあるの？」と矛先を変えてきた。

「……質問の趣旨変わってませんか？」

「あなた、けっこう鋭いわね」

スーツの女はメガネを持ち上げながら瞠目していた。普通に気付くだろ。なんで知り合ったばかりのやつに貯金の額を教えなければならぬんだ。しかしそれすら俺たちにはどうでもいいことじゃないのか？ 地獄の沙汰も金次第とは言うが実際そうもいかないだろう。

「でもこれはとても重要な事項なの」

「ずいぶん食い下がってくるのな。」

違和感を覚えながらも俺は貯金の額をスーツの女に教えた。もちろん近くにいるパジャマの女にも筒抜けである。俺の人生は今日で幕を閉じるのだ。貯金の額なんてどうでもよかった。スーツの女は一息いれたあと大真面目な顔で切り出した。

「どうすれば働かずに一生を過ごせるか、それだけを十年考えてきたの。だけど、その命題を解くのは困難を極めたわ」

スーツの女は自分の飛び降りたい理由らしきものを語り始めた。らしきものと付けたのは、いまのところよくわからない内容だからである。生活費を賄えるだけの不労所得があればいいわけだが、その体系を構築するまでが難しいからな。

「それで結論は出たんですか？」

先を促すと、スーツの女は「いいえ、未だに」と残念そうな顔をした。パジャマの女はなにを言ってるかわからないといった感じ。頭の上に巨大なハテナマークを浮かべていた。助け舟を出してもらおうと視線が俺とスーツの女を行ったり来たりしているが、できれば俺を見るときはもうちょっと柔らかい感じで頼む。見開いた瞳にまだ慣れてないんだよ。

「それはそうと、どうしてそんなことを考え始めたんですか？」

なにげなく口をついた質問に彼女はこう言い放った。

「だって、働いたら負けだと思ってるの」

絶句したね。それから俺は啞然としていた。この人、ただのダメ人間だよ。まともに取り合っていた自分がバカらしく思えた。働いたら負けってどういう理論だよ、どちらかといえば働いてないほうが負けてるだろう。スーツ姿なのが余計に苛立ちを助長させた。本当にただのコスプレだったのかよ。

## 第五話

「つまり、その方法が見つからなかったから飛び降りるという結論に？」

「ありていにいってそうなるわね」

人間失格である。いくらなんでも普通もうちよつとマシな理由があるだろうよ。絶望というほどのものじゃないにしても、少しは辛いとか苦しいとか悲惨を共有できるようななにかがあるんじゃないのかよ。そんなつまらないことですべてを終わりにするなんてあまりに口惜しいじゃないか！

「本当にそんな理由で飛び降りるつもりだったんですか？」

「そんな理由ってなによ。他人にとってどうでもいいことだって本人にとっては重大なのよ」

スーツの女はふいつと顔をそむけた。そりゃそうなんだろうけど、今回ばかりは俺の言ってることが正しいと思うぜ。たった一度きりの人生なんだ。やっぱりそんな理由で終わらせるのはなんか違う気がするんだよ。さっきのスーツの女の反応からしてパジャマの女のほうがりっかりした理由を持っているように思えた。人は見た目によらないとはよくいったものである。そのパジャマの女が口を開いた。

「理由を話していないのはあなただけになりましたね」

正論だった。ただひとつ、俺が彼女の理由を聞かせてもらっていないという事実を除けばな。悔しいのもう一度だけ訊いておく。

「俺には理由を聞かせてもらえないんですか？」

「はい」

即答かよ。

時間だけが緩やかに過ぎていく。

神様のくれた罰ゲーム、もとい贈り物はいつまで続くのだろう。

相変わらず瞳を見開いているパジャマの女とOL風コスプレの女

をぼんやりと眺めながら、俺はいろいろな出来事を思い出していた。この二人にからまれないければ飛び降りる理由をじっくり思い出すこともなかっただろう。

父が亡くなったのを機に母まで調子を崩し、今ではほとんど寝たきり状態で完全介護がないと生きてさえいけない。まだ六十にもなっていないのにだ。介護と仕事で疲れ果ててしまい、とうとう俺は母を手にかげようとしていた。思い出すだけで冷や汗が出る。薄暗い部屋でふと我に返った瞬間を今でもはっきりと覚えている。君がいなくなれば母親はどうなるんだなんて常識的な模範解答を示してくるやつがいたら、俺は遠慮なくそいつをぶっ飛ばしてやる。そんなことはわかってる。でもどうにもならないんだ。

俺の理由も他人からみればつまらないものなのだろうか？

不意に、俺は現状を打破できる考えを思いついた。

「そうか、わかった。矛盾してたんですよ、もつと単純に考えればよかったです」

スーツの女とパジャマの女は顔を上げてこちらに注目した。

「俺たちは別に集団で行動する必要はないんですよ。パジャマのあなただけ残って、俺たち二人は別の場所へ行けばいいんです。それですべて解決ですよ」

「あなた、いまさら当たり前のことを得意気な顔で言わないでちょうだい」

もう限界だ。泣き散らかしてやるうかと思った。俺の扱いひどすぎるだろ。理不尽にもほどがある。当たり前のことを言ってるのは百も承知だった。だがしかし、今の俺たちに必要なのはその当たり前の行動だろうと言いたいのだ。

「そんなことより、あなたの理由を聞きたいわ」

俺の意見を「そんなこと」で片付けるな。頼むから俺の話も聞いてくれ。

嘆いたところで話は終結しないからな。少しためらったが隠すような内容でもない。

「母の介護と仕事に追われる毎日に疲れてしまったんですよ」

俺は真実をそのまま口にした。パジャマの女が初めてその大きな瞳をぱちくりと瞬きした。スーツの女はさらっと言う。

「あら、そんな理由で飛び降りるつもりだったのね。残念だわ」

「……」

あなたにだけは言われたくない台詞です！ 口には出さず俺は心の中でおもいつきり叫んだ。なんかもう抵抗する気も出ないほど疲れた。どうにでもなれだ。

「それなら名案があるわ」

スーツの女はなにかをひらめいたように指を立てて言った。できれば聞きたくないんだが、俺は仕方なく合いの手を入れた。

「……どんな？」

「私がああなたの母親を介護する、そのかわりあなたは私を養うの。」

もちろん、途中で契約違反をされたら困るからそれなりの手続きは踏んでもらうけどね」

もっとわかるように説明してくれ。さっぱりわからない。

「……あのう、言ってる意味がわかりません」

「あなた、もしかしてバカなの？ とても簡単なことじゃない。あなたは仕事だけをする、私はあなたの母親を介護する。あなたは時間の余裕ができるし私は一生働かずに済む。そうすれば、お互いに飛び降りる理由はなくなるわ。ついに一生働かずに済む方法を見つけたのよ」

スーツの女は嬌声をあげた。

天然なのか、こいつ。彼女は一般の男女なら誰でも思い至るようなことを得意気に語り出したのだ。さっき俺にひどいダメ出しをしたくせにな。とはいえ、理屈ではスーツの女のいうとおりだった。もしそうなれば俺も彼女も飛び降りる理由がなくなる。

「それとも私じゃなにか不服でもあるのかしら？」

返事を渋る俺にスーツの女は小悪魔的な笑みをたたえて俺を急かした。

「あ、いえ、そういうわけじゃなくて」

「それなら決まりね」

ウインクするスーツの女の顔が印象的だった。記憶が揺さぶられる。

ひょっとして俺はどこかで彼女に会ったことがあるんじゃないか？

ああもう、なんでもいいや。俺は諦めた。成り行きに身を任せてやる。

しかしそうになると、ひとつ問題が残る。

「俺たちは解決したとしても……彼女はどうする？」

俺は話に置いていかれた感のあるパジャマの女を指差した。

「ああ、そうね。忘れていたわ」

おいおい。

一番インパクトのある人物をよく忘れられるものだと感心した。

## 第六話

「とりあえず、電話しないとね」

スーツの女は内ポケットから携帯電話を取り出し、メモリーから誰かの連絡先を探し始めた。ややあつて「あつた」とつぶやき彼女は通話ボタンを押した。

当然、近くからホラー映画の怖い場面でかかりそうな曲が聴こえてきた。

音のする方へ視線を移すと、パジャマの女がおもむろにズボンのポケットから携帯電話を取り出している。靴はないのに携帯は持っているのかよ。

「あ、はい」

パジャマの女が携帯に出る。スーツの女は明るい声で話し始めた。というか、この距離なら直接しゃべれるだろ。

「作戦ウマくいったみたいだから、もうあがつてくれていいよ。ありがとうね」

「あ、はい。わかりました」

俺は目の前で繰り広げられている会話を理解することができなかつた。狐につままれたような気分だった。パジャマの女はスーツの女に一礼して屋上から足早に立ち去っていった。

しばし呆然、すぐに自分を取り戻してスーツの女に詰め寄った。

「おい、頼むから俺が理解できるように説明してくれないか？」

「彼女は私が雇った便利屋さんなの。今回の作戦を実行に移すためのね」

「便利屋？」

いろいろツツコミたいがまずはここからだろう。

「そうよ、『美人だけどちょっと変わってる女』を用意してもらったの」

あれは『ちよっと』ではなく『相当』だよ、と俺は独りごちた。

「……あとでその便利屋教えてくれ、本当に便利そうだな」  
「ええ、いいわよ」

すでに現実離れし過ぎていて、なにが正しくてなにが嘘かなんてわかりそうもない。ただパジャマの女もスーツの女も飛び降りるためにここへ来たわけではないようだった。それなら言っておきたいこともある。

「次に依頼するときは飛び降りそうな人の後ろから大声で呼びかけるのは止めるように伝えておいてくれ。俺、それで落ちかけたからな」

「今度、叱っておくわ」

スーツの女は呆れたような素振りをみせた。

もうひとつ訊いておかなければならない。おそらくこちらのほうが重要だろうしな。

「作戦つてなんだったんだ？」

「私だって十年間ただ遊んでたわけじゃないわ。リサーチしていたのよ、いろんな人の人生をね。だから、あなたのこともずいぶん調べさせてもらったわ」

その労力を働くことに使えばいいのになんて口が裂けてもいえやしない。彼女の口振りからして今日の出来事は偶然ではなく必然ということなのだろう。

「じゃあ、今日の出来事は偶然じゃなかったんだな？」

「もちろん」

彼女はしたり顔で言い切った。予想していたとはいえ、いざ肯定されると俺は驚きを隠せなかった。すべてが用意されていた必然だと仮定すれば、俺は死の淵から人為的に救われたことになる。そして、その首謀者が彼女なのだろう。

「驚いているようね。一生働かずに暮らす方法を知らないって言うたでしょう。実はあれ、嘘なの。本当はすでに見つけていたのよ」

その言葉で我に返って、俺は彼女の顔を凝視した。まさかとは思うが例の言葉を口にするつもりなのか？

「それって、ええと……」

あまりにありふれた答えと思い言いかねていると、スーツの女は世紀の大発見でもしたかのようにのたまった。

「結婚よ」

笑うしかなかったね。腹を抱えて笑う俺の姿を見て、彼女は焦りながら「な、なにか間違ったことでも言ったかしら？」と疑問の声をあげた。だから俺は言っちゃった。

「いえ、なにも。あなたはある意味で天才だと思うよ。だからこれまで、そんなに可愛いものにちつともモテなかっただろ？」

「なっ、し、失礼ね！」

図星だったようである。彼女は顔を真っ赤にしながら否定していた。

「これから忙しくなるわ。役所に婚姻届を出して、それからあなたに保険に入ってもらわないとね。数年で未亡人にされたら大変なんだから。あと、あなたの母親にあいさつへ行かなければならないわ」  
彼女は淡々と語りながらもどこか嬉しそうだった。

今日すべてを終わらせようとしていた俺は、奇妙な巡り合わせによつて、出会ったばかりの女と結婚することになった。とんでもない話である。それでも俺は、この謎の女との結婚になんの抵抗も感じていなかった。不安より好奇心のほうが勝っていた。いや、それだけではあるまい。いずれ彼女の口から真相を聞ければと思っっている。訊きたいことは山ほどあるんだ。

俺たちは以前にも会ったことがあるのか？

なにより、どうして俺を選んだんだったな。

「行きましよう、もうここにいる理由がないわ」

スーツの女は歩き出し、俺はそれに従いついていった。屋上のドアを開きながら彼女は思い出したように俺を振り返った。

「そうだ、まだあなたの名前を聞いていなかったわ」

「十年間なにやってたんだよ！」

「う、うるさいわね。名前なんてたいして重要じゃないのよ」

俺は苦笑した。まだ互いの名前も知らない相手と結婚しようとしていたのだ。

「大木悟です」

名乗る俺の顔を見て、彼女は驚いたような表情を浮かべた。

「あなた、そういう顔で笑うのね。さっきまでこの世の終わりみたいな顔してたけど、今みたいな笑顔は嫌いじゃないわ」

俺は彼女に続いて屋上を出た。この先どうなるかなんてわからない。しかし、そんなことは重要ではなかった。希望の光などなくてもいい。今日この日に起こった運命の出会いを楽しむだけである。

地上に降りて空を見上げた。さっきまでと違う景色に見えた。

明日がある。

それだけで幸せだった。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5615d/>

---

奇妙な関係

2008年8月29日18時39分発行